

# エネルギー問題と学校教育について

昭和57年10月12日

昭和52年および53年に中学および高校の学習指導要領が9年ぶりに改訂され、それに準拠した新しい教科書は、選択期間を経て、中学が56年から、高校が57年から全面的に使用されている。資源・エネルギー・原子力問題のこれら教科書における扱われ方と学習指導における問題点を概観する。

## 〔I〕教科書における記述の傾向

昭和48年の石油危機を経たこと也有つて、以前の教科書に比して、資源・エネルギー問題の重要性、その国際性、資源の有限性、代替エネルギー開発や節約の必要性について、いずれの教科書も相当のスペースを割いて取り上げている。

### (1) 中学

「社会」の地理的分野、公民的分野、「理科」の第1分野、第2分野においてこれらの問題が扱われているが、生徒の理解をうるために種々の図表、写真を使って工夫がこらされているものの、全体的に個々の現象、その各侧面がばらばらに記述されており、それを次の世代が如何に統合判断すべきかという視点はほとんど欠如している。従って生徒の頭に残りやすいことは、エネルギー施設が環境を破壊するとか、原子力発電所の事故とか、廃棄物問題が未解決とか、住民の心配、対立とかといった暗い側面だけではないかと思われる。とくに代替エネルギーとしての原子力発電の「必要性」をのべ

ているところには、必ず「放射能の危険」とか「スリーマイル事故」とかが免罪符のように附記されている。

## (2) 高校

新指導要領によって今回社会科の中に「現代社会」が新設され、広領域的な総合学習をめざしている。その小項目の中に「人口問題と資源・エネルギー」があり、エネルギーについては、生活とエネルギー、資源の有限性、資源ナショナリズム、日本の対外依存、新エネルギー開発、節約、が扱われている。

中学の場合よりも内容が精緻になっているものの、やはり個々の事柄の羅列に終っており、総合判断力を養うといった側面は極めて不充分といえよう。原子力発電についても、「必要だが---危険性、心配、廃棄物、兵器に關係---がある」という形のものが大半である。対照的に太陽、バイオマス---の「自然」エネルギーについては将来の希望が強調されている。「物理」等における記述は、科学的説明が主であり、問題は少ないようである。

## [II] 今後の問題点

各教科書の記述内容は、約3年間のいわゆる「白表紙」の期間に広く関係者が目を通す機会があり、いくつかの是正の意見がでてそれが取入れたので、明らかな「あやまり」と指摘できるものはほとんどないといっていいであろう。（原子力の安全性のようなセンシティブな事柄については、「---という意見もある」とか、「まだかなりの疑問が残っている」といった表現が多く、中々誤りとは断じ難い。）従って問題は、教育の現場において、このような教科書を教師がどう使いどう教えているかということである。とくに受験偏重や教師の質が問われ、教育の荒廃が叫ばれている中で、資源・

エネルギーのような最新の情報なくしては理解しがたい問題を良心的に教えることは至難のことであり、教師はどうしても手近かな「指導書」や新聞記事に頼ってしまうことになりがちである。教育長の認定で使えることになっている「自主教材」による教育法も正常に行なわれている例は少なく、逆にきわどい事例が多いし、「指導書」については部外者が立入りにくいだけに「教科書問題」のひずみがそこにもちこまれている場合も少なくない。